2019 年度中央大学共同プロジェクト　研究実績報告書

１．概要

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="3">研究代表者</td><td>所属機関</td><td colspan="2">法学部</td><td>2019 年度助成額</td></tr>
<tr><td>氏名</td><td colspan="2">一政　史織</td><td rowspan="2">2,096（千円）</td></tr>
<tr><td>NAME</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">研究
課題名</td><td>和
文</td><td colspan="2">19 世紀から 20 世紀北米における移民をめぐる規制と移民コミュニティの変容</td><td rowspan="2">研究
期間</td><td rowspan="2">2017 年度
～
2019 年度</td></tr>
<tr><td>英
文</td><td colspan="2"></td></tr>
</table>

２．研究組織

※所属機関・部局・職名は 2020 年 3 月 31 日時点のものです。

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	一政 史織	中央大学・法学部・教授	研究統括、理論（社会学、文化研究）、移民をめぐる米国の世論や社会運動、移民たちのトランスナショナルなメディア活動や社会運動	研究代表者
2	小田　悠生	中央大学・商学部・准教授	米国の移民政策、政府関係資料、NGO 組織の資料の収集、分析、人権概念の変容の検証	研究分担者
3	和泉　真澄	同志社大学・グローバル地域学部・教授	米国、カナダの日系人史、社会・文化史、新たな史料の発掘、聞き取り調査、移民の主体的な経験や語りの収集と分析	研究分担者
合計　　3　名				

３．２０１９年度の研究活動報告　※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

（和文）

I.　本研究の目的と 2019 年度の研究目的の概要

本研究は、北米の移民史について、トランスナショナリズム、人権、移民や移民をとりまく人々の主体的な戦略やコミュニティの変容という重要な論点を中心に、各共同研究者の様々な事例研究を比較検討、統合することを目的にしている。アメリカ合衆国、カナダの移民たちの歴史を多角的に読み解くために、また、北米の移民についての研究の欠落部分を補うために、本研究では、それぞれが重要な事例について史料を発掘し、情報を分析、意見交換を行ってきた。2019 年度は、前年度までの共同研究での蓄積をもとに、移民と移民を取り巻く人々―特に、専門家と呼ばれる人々、社会改革やボランティア活動などの運動家や移民と関わる団体の関係者、政府や政策立案関係者の関わりやネットワークに注目した。そして、移民の排除と包摂、人権や権利の問題がどのように歴史的に論じられてきたのか、また、実際に経験されてきたのかを整理し、共同でパネルを組んで発表する準備を進めることとした。

本年度末に発生した COVID19 の世界的感染拡大は、グローバルな人・モノ・情報の流れ、送出国や受入れ国といった国家の枠組みや役割、エスニシティ・民族・国民などの集団意識の形成、そして、国際機関やグローバルなネットワークの役割などをより多角的に検討することが喫緊の課題であることを浮き彫りにした。このような中で、本研究は、人の移動、移民や移民に関わる人々の経験や記憶を記述することで、実証的かつ多元的な視点からグローバルな人の移動を俯瞰し、その歴史の共通性を叙述することとなったと思われる。

II.　2019 年度の国内、国外での共同研究活動

本年度は、共同研究の最終成果として、アメリカで最大の歴史学会である Organization of American Historians 年次大会（2020 年 4 月 2 日- 5 日、於アメリカ合衆国ワシントン DC）にて次年度に発表する予定であったため、そのための準備をすすめた。まず、昨年度来日し、本共同研究者と共に授業や講演、研究交流を行った Katherine Benton-Cohen 教授（ジョージタウン大学）も交えて、メール等で情報交換、研究打ち合わせを実施した。

2019 年 5 月に OAH より、本共同研究のパネル、“Emergence of Immigration “Specialists: Ideas about Inclusion and Exclusion of Immigrants in the Early- to Mid-20th Century”（「移民をめぐる「専門家たち」の出現―20 世紀初頭から半ばまでの移民をめぐる排除と包摂論」）が採択されたとの通知を得た。発表者は共同研究者 3 名、司会兼コメンテーターを Benton-Cohen が務める予定であった。発表者となる共同研究者三名は、それぞれ以下の発表テーマについて研究を進めた。まず、一政（野村）は、“Representation of immigrants and their gender roles: Emily Greene Balch and her social work in the early 20th century United States”（「20 世紀初頭のアメリカ合衆国における移民の表象とジェンダー役割―エミリー・グリーン・ボルチとソーシャルワーク」）というテーマで、20 世紀初頭に移民を対象とした社会改革運動や学術研究に関わり、後に国際的な平和運動を先導したアメリカ人女性に注目した。そして、彼女と移民女性たちやその出身国の女性達とのネットワークについて研究を進め、移民女性達の表象や排除・包摂について考察をすすめた。次に和泉は、“Keepers of Concentration Camps?: Federal Agents who Administered Japanese Americans during World War II”（「強制収容所の監視員―第二次世界大戦中に日系アメリカ人を管理した連邦職員たち」）というテーマで、米国大西洋岸地域の日系人の強制移動、収容、釈放のために設立された戦時転住所（強制収容所）を運営、管理する連邦職員の記録を分析した。そして、今まで人種主義という視点でのみ主に分析されてきた日系人の強制収容について、人種、リベラリズム、ソーシャルエンジニアリングという三つの要素の変容する関係性という視点から歴史的に移民の排除と包摂を考えようとした。最後に、小田は、“Towards a More Equal Immigration Policy: Pre-war Origins of Post-WWII Liberal Coalition and Immigration Reform”（「より平等な移民政策

へ―第二次世界大戦後のリベラルの連携と移民改革」）というテーマで、20 世紀前半から、戦中、戦後を経て、1964 年移民法成立に至るまでのリベラル派の団体や組織の連携の過程やその移民政策改革論について詳述しようとした。これらの団体や組織は、国別割当制度にまだ全面的に反対運動を展開するまでには至っておらず、また、政府諸機関とも慎重に連携していたため、移民政策についての既存の研究ではほとんど取り上げられていなかった。小田は、様々な宗教団体や移民組織を含む、これらの諸団体や諸組織の連携に注目することで、優生学的な制限主義に対抗する信教やエスニシティを超えた連携の歴史が、第二次世界大戦後の移民改革のイデオロギー的かつ組織的な基礎となった様子を示し、そこで移民の排除と包摂論がどのように形成されたかについての検討を進めた。

これらの分担テーマについて、チーム内ではメール等で意見交換を行い、お互いの論考の回覧を行った。また、人文研「南北アメリカの歴史、社会、文化」チーム（主査：一政）を利用して、メンバーが定期的に集まり、テーマについて意見交換等をおこなった。(開催日は、2019 年 10 月 5 日、2019 年 11 月 30 日、2020 年 1 月 27 日。詳細は小田が作成した HP（https://sites.google.com/view/americas-jinbunken-chuo/home）参照のこと。)

さらに、2020 年 2 月末～3 月に発表の予行と最終研究打ち合わせを兼ねた共同研究会を東京で開催する予定であった。しかし、COVID19 のアジアでの流行を受けて、研究会を自粛することとなった。また、発表に向けて準備を進めてきた OAH の年次大会自体も、欧米での新型コロナウィルスの爆発的流行、渡航制限等を受けて、直前で全面中止となった。

III.　各自の研究の進展と共同研究への寄与

以上の共同研究発表への取り組み以外に、以下、共同研究全体に寄与する形で、各自の研究と研究費の執行がどのように進められたのかも付記する。

①　一政（研究代表者）は、昨年に引き続き、20 世紀初頭の移民や移民をめぐる人々の関わり合いや、越境的に広がっていったネットワークに注目し、移民の排除と包摂について、収集した文献や資料の分析を進めた。具体的には、東欧系移民コミュニティの動きについて、共著論文を執筆し、学会発表を行った（科研費補助を受けた成果でもある)。また、東・南欧系移民やアジア系移民への支援や社会改革運動に関わり、後に国際婦人平和運動を主導していったエミリー・グリーン・ボルチについて研究を進め、論文を発表することができた。しかし、2020 年 2－3 月に計画していた資料収集、研究会の開催や参加は、新型コロナウィルス感染拡大のため実施不可能となった。

②小田（研究分担者）は、連邦政府と地方自治体、人権団体や移民の権利運動に関して調査を進め、移民をめぐる排除と包摂を考える論文等を発表した。2019 年度前半の主な活動と使途は、2017 年度に実施したアメリカ合衆国テキサス州オースティンでの調査、2018 年度に実施したアメリカ合衆国ワシントン DC での海外調査に基づく資料整理と関連文献（当該テーマの歴史学と隣接する社会科学分野の文献が主である）の購入であった。予定していた主要な使途は、2020 年 3 月にアメリカ・ニューヨーク市での追加調査であったが、COVD19 の状況悪化に伴い渡航を中止したため、当初計画が実現しておらず、研究費の残額が発生した。

③　和泉（研究分担者）は、今までの研究の総括として、著書２冊の刊行、刊行論文１本、口頭発表３件、フィールドワーク３回、ならびに学会のラウンドテーブル企画および講演を行なった（但し、これらは科研費等の補助の成果でもある)。これらは、移民をめぐる排除と包摂について、特に、「移民の経験や語りコミュニティの変容」という視点から、草の根の移民個々人の声や新たな史料を集めて分析した研究成果である。しかし、COVID19 感染拡大により、2020 年 2－3 月に予定していた東京での共同研究打ち合わせ等、研究会参加や追加調査等を行うことができなかった。

以上のように、共同研究の最終年度であった 2019 年度において、本共同研究チームでは、各自の研究を発展させながら、それらを統合する形で国際学会でのパネル発表の準備をすすめることができた。しかし、COVID19 の感染拡大とそれに伴う様々な制限のため、研究計画の実行にずれが生じてしまったため、1 年の研究期間特別延長措置を申請した。OAH については、学会自体は完全に中止になってしまったが、別の形で共同研究の成果を発表したいと考えている。

（英文）

The purpose of our research is to examine the concepts of nation, race and citizenship by analyzing the changing transnational socio-political, economic and cultural contexts of immigrants in the globalizing world as well as by exploring their individual life history. In particular, we look at various regulations on emigration/immigration as well as many supporting systems for immigrants. We try to describe the impact of these contradictory factors on the formation and transformation of immigrant communities in North America since the late 19th century.

This year, we prepared for our panel presentation, "Emergence of Immigration "Specialists: Ideas about Inclusion and Exclusion of Immigrants in the Early- to Mid-20th Century", which was supposed to be presented at the 2020 annual meeting of the Organization of American Historians(OAH), Washington D.C., April, 2020. (Ichimasa, Oda and Izumi would be participants to present papers, and Prof. Katherine Benton-Cohen would be a commentator and chair.)

Through organizing and attending study meetings and having active communication each other, we discussed how socio-political, economic, and cultural contexts and the international relations of the U.S. and the immigrants' home countries shaped the perceptions of and responses to immigration and immigrants. From this view point, we explored historical ideas about the inclusion and exclusion of immigrants.

For the panel presentation, in particular, we examined groups and networks of immigration "specialists," activists, reformers, and government agents, who emerged in the early- to mid-20th century, as well as immigrant responses to these actors. Ichimasa researched immigrant communities and American female activists in the early 20th century. She focused on Emily Greene Balch (1867-1961), one of the most important activists in American settlement and international women's peace movements as well as a leading scholar in a women's college. Ichimasa tried to explore how women's social movements formed images of racial, national, and ethnic boundaries and fixed gender roles for minority groups. This research also illustrated how women, both immigrant women and American female activists, envisioned a global network of women for peace through personal experiences and relationships with other women.

Oda studied pre-WWII immigration reformers and traced the origins of post-WWII liberal immigration reform back to the late 1920s and the 1930s. In particular, he discussed one of the oldest liberal immigration reform coalitions, the Joint Conference on Immigration Policy formed in 1930, which was reorganized into the American Immigration Conference in 1953. Oda argued that early efforts to promote cross-faith and cross-ethnic cooperation to counter eugenicist restrictionism laid both the ideological and organizational foundations of post-WWII reform for a more "equal" immigration policy.

Izumi researched the internment of Japanese Americans during WWII, one of the foremost

violations of the equal protection of citizens. Izumi focused on federal agents who administered the War Relocation Centers established to detain, manage, and release Japanese Americans excluded in the Pacific Coast. By combining archived findings and theories, her study attempted to present a more holistic understanding of officials involved in the wartime management of Japanese Americans. Izumi tried to contextualize this historical episode in the shifting relationship between race, liberalism, and social engineering by the U.S. federal government.

In conclusion, we have been conducting collaborative research and making an effort to integrate theoretical and empirical research practices. However, because of the COVID-19 outbreak from January 2020, research meetings and research trips that we had intended to be involved in were canceled, and we were forced to change our research plan.

As for each member's research achievement, see the list below.

４．主な発表論文等（予定を含む）※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

【学術論文】《著者名、論文題目、誌名、査読の有無（査読がある場合は必ず査読有りと明記してください）、巻号、頁、発行年月》
一政（野村）史織「19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカ合衆国における女子高等教育とソーシャルワーク―エミリー・グリーン・ボルチの教育と活動を中心に」、『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）、第 93 号、2019 年 9 月、257-277 頁。（査読あり）
小田悠生「アメリカ合衆国から見た米墨国境―歴史のなかの国境線・国境地帯・国境」『歴史学研究』、995 号、2020 年 4 月、33-43 頁。（査読あり）
小田悠生「2019 年の歴史学会 - 回顧と展望―北アメリカ」『史学雑誌』第 129 巻 5 号、2020 年 5 月予定。
小田悠生、（書評論文）「戸田山佑『ブラセロ・プログラムをめぐる米墨関係―北アメリカのゲストワーカー政策史』（彩流社、2018 年）」『アメリカ史評論』第 37 号、2020 年 1 月、31-38 頁。
【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）
一政（野村）史織「スラヴ系移民像とジェンダー観―アメリカ合衆国セツルメント運動活動家エミリー・グリーン・ボルチの思想」、日本西洋史学会年次大会第 64 回、静岡大学、2019 年 5 月。
Izumi, Masumi, "The Stockade Diary of Tatsuo Inouye: Thoughts and Experiences of a Kibei Judo Practitioner in the Tule Lake Relocation Center," Annual Meeting, Association for Asian American Studies, Madison, Wisconsin, USA. April 2019.
Izumi, Masumi, "Remembering is Not Enough: Continuing Misconstruction of Japanese American Exclusion Cases as Legal Precedents," アメリカ学会年次大会　Workshop E "Contingent Citizenship: Have the Korematsu Decisions Been Overturned ?" 法政大学, June 2019.

Izumi, Masumi, “Starvation, Sickness, and Shaved Heads: Alien Bodies and Resistance in the Japanese American Segregation Center,” Annual Meeting, American Studies Association, Honolulu, Hawaii, USA, Nov. 2019.

【図　　書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）

一政（野村）史織「子どもたちに語る移動の言説―アメリカ合衆国のクロアチア民族協会青少年部」、北村暁夫編『近代ヨーロッパと人の移動』、山川出版、2020 年 5 月刊行予定。（共著）

Izumi, Masumi, *The Rise and Fall of America's Concentration Camp Law: Civil Liberties Debates from the Internment to McCarthyism and the Radical 1960s* (Temple University Press, 2019). （単著）

和泉真澄『日系カナダ人の移動と運動－知られざる日本人の越境生活史』、小鳥遊書房、2020 年。（単著）

Izumi, Masumi, “The Vancouver Asahi Connection: (Re-)engagement of the Families of Returnees/Deportees in Japanese Canadian History,” in Cathy J. Schlund-Vials, Guy Beauregard, Hsiu-chuan Lee, eds. *The Subject(s) of Human Rights: Crises, Violations, and Asian American Critique* (Temple University Press, 2019), pp.56-73. （共著）

【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）